

第1章 紀州のあけぼのと古代人



律令制と紀伊国

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

国府と南海道

奈良時代には、奈良に ^{へいじょうきやう}平城京という都がおかれ、^{てんのう}天皇を中心にして、全国を支配するしくみ(律令制)ができあがりました。全国は60あまりの国に^{くわ}分けされ、朝廷から派遣された^{ちやうてい}国司という役人たちは、それぞれの国を数人でおさめることになりました。また国司は、^{こくふ}国府という役所で仕事をしていました。都と全国の国府は、7本の大きな道で結ばれ、都と連絡をとったり、都へ^{ぜい}税をおさめたりすることに使われていました。

現在の和歌山県は、紀伊国という国に含まれ、その中は伊都・那賀・名草・海部・安謐(在田)・日高・牟婁という7つの郡に分けられていました。一部、これらの郡の名前は現在でも使われています。紀伊国の国府の建物の跡は見つかっていませんが、現在の和歌山市府中のあたりにあったのではないかと考えられています。また、7つの郡にはそれぞれ郡の役所がおかれ、その土地に住む豪族が郡司として支配していました。日高郡の役所のあとは、^{ごぼう たから}御坊市財部で発見され、調査が行われました。

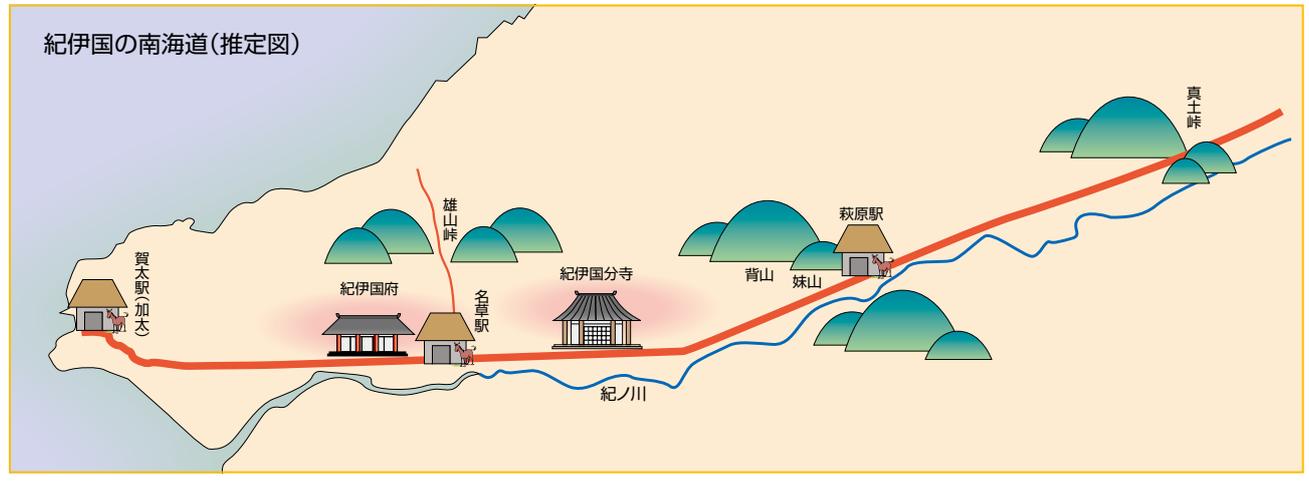
都につながる^{なんかいどう}南海道という大きな道は、道はばが10mもあり、紀ノ川の北にそって造られ、さらにその



紀伊国分寺跡発掘のようす(紀の川市)

道すじは現在の和歌山市加太から船で淡路国(兵庫県の淡路島)にわたり、四国につながっていました。南海道の途中には、^{ほぎわらの}萩原^{えき}駅(かつらぎ町萩原)・^{なぐさの}名草^{えき}駅(和歌山市山口)・^{やまぐち}賀太^{えき}駅(和歌山市加太)がおかれ、役人が旅行するために使う食料や馬・船などを用意していました。

奈良時代の中ごろには、社会の不安をしずめるために、^{しやうむ}聖武^{てん}天皇が平城京に^{とうだいじ}東大寺をつくらせ、またそれぞれの国には^{こくぶんじ}国分寺と^{こくぶんじ}国分尼寺を建てることを命じました。紀伊国の国分尼寺について



ははっきりとわかりませんが、国分寺は現在の紀の川市東国^{ひがしこく}分に建物のあとが残っており、発掘調査が行われました。

農民と税

そのころの農民は、さまざまな税をおさめなければならぬことが法律で決められていました。6歳以上の農民は、一定の広さの田んぼ^{くぶんでん}（口分田）が貸し与えられ、取れた稲の3%ほどを国府におさめることになっていました。また、大人の男の人は、工事で働かされたり、兵士として都や九州・東北地方に行ったり、地方の特産物^{とくさんぶつ}を税として朝廷に納めなければなりません。

農民に貸し与えられた田んぼは、7世紀の中ごろまでに、その形や大きさが整えられました。航空写真を見ると、現在も和歌山県内の平野では、そのころに整えられた条里制とよばれる田んぼの形が残されている場所が見られます。

それぞれの国から朝廷に納められる特産物は、当番の農民たちが都に運ぶことになっていて、その荷物につけられていた木の荷札（木簡）が、奈良県の平城京の跡などから見つかっています。木簡には、税をおさめた人の住所・名前や特産物の種類などが書かれています。このような木簡を調べると、紀伊国の特産物は塩や魚・貝・海藻など、海でとれるものが多かったことがわかります。また、漢字が少しちがう場合もありますが、「指理」（かつらぎ町）・「可太」（和歌山市）・「浜中」（海南市）・「吉備」（有田川町）・「財」（御坊市）・「南部」（みなべ町）など、今でも使われている地名が書かれた木簡が発見されています。



木簡（平城京跡出土 奈良文化財研究所蔵）



わかやまの知識

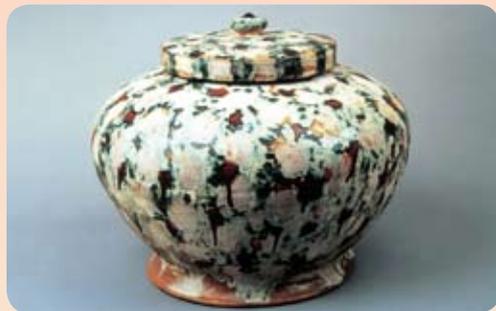


【三彩壺】

この写真のつぼは、1963（昭和38）年に橋本市高野口町^な古曾の柿畑の中から発見され、現在は京都国立博物館におさめられています。中国、唐の文化にならって、奈良時代に日本で作られたもので、高さ22.5cmのつぼの中には、男の人の骨^{ほね}がおさめられていました。これは、なくなった人を火葬したあと、その骨を入れたふた付きの骨つぼ^{こつ}で、近くにあった寺（名古曾廃寺）と関係のある人物をほうむったものではないかと考えられています。

紀伊国では、有力な豪族^{ごうぞく}によって、7世紀の終わりごろから各地に寺が造られるようになり、和歌山県内には、そのころの寺の建物の土台に使われた石や、屋根のかわらが見つかった場所が10か所以上もあります。その中でも、道成寺^{どうじょうじ}（日高川町）は現在まで続いているただ一つの寺です。

また、紀伊国で生まれ、奈良の薬師寺で活躍した僧の景戒^{きょうかい}は、平安時代の初めに仏教の教えを物語でわかりやすく説明した『日本霊異記』をつくりました。その中には、奈良時代終わりごろの紀伊国各地の物語がたくさんおさめられています。ちなみに、このころ紀三井寺^{きみいでら}（和歌山市）や粉河寺^{こながわでら}（紀の川市）が開かれたと伝えられています。



三彩壺（京都国立博物館蔵）